

家庭学習応援教材

中世の軍記物語 『源平盛衰記』を読む

関西学院大学 神学部・商学部・教育学部・国際学部・総合政策学部 2013
過程の演習 新国語問題集アシスト【古文編】

次の文章は『源平盛衰記』の一節であり、一の谷で源氏軍に敗れた平家方の三位中将平維盛が、一族と別れて屋島から高野山へと向かう場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。

山伝ひに都へ上りて、恋しき人どもをも今一度見ばやと思しけるが、御さまをやつし給へども、なほ世の常の人にはまがふべくもなし。本三位中将の生け捕られて、京田舎恥をさらすだに心憂きに、我さへ憂き名を流さんも口惜しく思はれければ、千度心は進みけれども、心に心をからかひて、泣く泣く高野へ参り給ふ。思し召し出づる事ありければ、このついでに粉河寺へぞ参られける。この寺は大伴小手といひし人、我が朝の補陀落これなりとて、薨を結べる所なり。去んぬる治承のころ、小松殿熊野詣でのついでにかの寺に参り給ひたりけるに、書き置き給へる打ち札あり。今一度父の手跡を見給はんと思ひ出で給ひけり。かの札を御覧すれば、落つる涙に墨消えて、文字の形は見えねども、重盛といふ字ばかりは彫りて墨を入れたれば、ありしながらに変わらねば、泣く泣くこれを見給ひける。手跡は千代の形見なりと言ひ置きたる言の葉も、げにあはれにぞ思し召す。

御堂に入り、観音の御前に念誦しておはしましけるに、僧一人来たりて共に念誦してありけるが、あやしげに見奉りて、「これはいづこより御参りぞ」と問ふ。「京の方より」と答へ給へば、「法然上人の入らせ給へるを聞こし召して御参りか」と言ふ。三位中将は、「その事かねて知らず。何事に入寺し給へるぞ」と返し問ひ給へば、「この間、念仏法問の談議なり」と申して、細かに問答して立ちぬ。

中将は与三兵衛を招きて、「わざとも都に上り、法然房に会ひ奉り、後世の事をも尋ね聞くべきにこそあれども、道せまき身なれば力なし。上人たまたまこの寺におはすなり。憚りあれども、見参し奉らん事いかがあるべき」とのたまへば、重景かしこまつて、「何の御慎みか候ふべき。上人をば生身の仏と承る。しかるべき善知識にこそ。後世菩提の御ために御聴聞あらん折節、たとひ災害に遭はせ給ふとても、痛く思し召すべからず。鬪諍合戦の場にして身を失ひて、修羅の悪所にも生まれ候ふなるぞかし。いはんや、聞法随喜の窓にして命を亡ぼす事あらば、弥陀の淨刹に往生せんと思し召さるべし」など、こざかしく申しければ、しかるべしとて、夜に入りて重景を御使ひにて、法然上人へ申されけるは、「維盛高野参詣の志ありて、屋島を忍び出でてこれまでまかり伝ひて侍るが、折節しかるべき事と存じ候ふ。出離の法文一句承らばや」と仰せられけり。

上人あはれに思して、やがて三位中将を請じ入れ奉り、見参し給ひて、「いかにやいかにや、ありがたうこそ思ひ奉れ。都を出で給ひて後、人々ここかしにて亡び給ふと承るにつけては、御身いかなり給ひぬらんと心苦しく思ひ奉るに、再び見参に入り奉るの御事、あはれに喜び入り侍り。さてもさしもの世の乱れの中に、はるばる高野参詣の御志、めでたくも思し召し立ちける御事かな」とて泣き給ふ。中将のたまひけるは、「家門の栄花、すでに身にきはまりて、先帝を始め参らせて、一族ごとく西海に落ち下りしうへは、人並々にあこがれ出でて候ひぬ。憂き事も多かりし中に、難波瀉、一の谷にて卿相雲客あまた亡びぬ。たまたま討ち残されたる者も、ある空も侍らず。ひねもすに今や

敵に失はると悲しむ。とにもかくにも静心なし。さればつひに逃るまじきものゆゑに、貴き結戒の地と承れば、高野に参りて出家をもちて、その後いかにもならばやと思ふ事侍りて、屋島を出でてこれまで伝ひつつ、見奉るこそ嬉しけれ」とて、その夜は庵室に留まり給ひ、泣きくどき物語し給ひけるが、暁方に「維盛幼きより身を放たず日所作に読み奉る御経おはします。水の底にも沈まん時は、同じく沈め奉らん事、罪深く覚え候ふ。もし世になき身と聞き給はん時は、思ひ出だして後世弔ひ給へ」とのたまひて、これを渡し奉る。

(注) *恋しき人ども：都に残してきた妻子。

*本三位中将：平重衡。維盛の叔父にあたる。

*補陀落：観音菩薩がいると伝えられる聖地。

*小松殿：平重盛。維盛の父。治承三年（一一七九）に病没した。

*法然上人：浄土宗の開祖。念仏による極楽往生を説いた。

*与三兵衛：維盛の従者。名は重景。

*善知識：人を仏道へと導く僧。

*修羅の悪所：地獄道や畜生道と並ぶ六道の一つで、戦いに明け暮れる世界。

*弥陀の浄刹：阿弥陀如来がいると伝えられる極楽浄土。

*出離：生まれ変わりを繰り返す迷いの世界から離脱して、悟りの境地に至ること。

*先帝：安徳天皇。母方の一族である平家と行動を共にしていた。

問 問題文の内容と合致するものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ 三位中将は父の書き残した打ち札の文字が消えていたのを見つけ、せめて名前くらいは刻み付けておいてほしかったのにと、残念がって涙を流した。

ロ 三位中将が粉河寺の御堂で出会った見知らぬ僧は、不審を感じた三位中将からの問いかけに對して、自分は京から来ている者だと告げた。

ハ 重景は三位中将から意見を求められた際、従者である自分が危険な目に遭わされることになったとしても、主君である三位中将を責めたりはしないと答えた。

ニ 粉河寺を訪れるまでの法然上人は、平家の人々が次々に命を落としていると知って、旧知の間柄であった三位中将の安否を気にしていた。

ホ 三位中将は幼い頃から読経の習慣があったので、極楽往生を願って最後まで肌身離さず持ち歩くための經典を、法然上人から譲ってもらった。

【解説】

◇本文の構成

第一段落

中将維盛は高野山へ落ち延び、亡き父重盛の書いた打ち札を見て涙を流す。

第二段落

お堂で念仏を唱えている時に、中将は法然上人がいることを耳にする。

第三段落

中将は家来に励まされて法然上人に会い、悟りを得たいと請う。

第四段落

平家と親交のあった上人も泣き、一晚中語り合った後、中将は覚悟の上、大切に持っていたお経を上人に託し、菩提を弔ってくれるよう頼む。

【現代語訳】

(中将維盛は)山伝いに都へ上って、(都に残してきた)恋しい妻子たちにもう一度会いたいと思いはなったが、身なりを目立たなくしていらっしやるけれども、やはり世間の普通の人とは見間違はずもない。本三位中将重衡が生け捕りにされて、都や田舎で恥をさらすことでさえ情けないのに、(叔父に加えて)私までもがづらい評判を流すのが情けないと思われたので、千々に心は乱れたけれども、(未練と断念という)二つの心の間で葛藤して、泣く泣く高野山へ参詣なさる。思い出しなされたことがあるので、この機会に粉河寺へ参詣なさった。この寺は相伴小手といった人が、我が国の補陀落はここだと言って、建立した所である。去る治承の頃、(父の)小松殿が熊野詣での機会にその寺に参詣なさった時に、書き残しなされた高札がある。もう一度父の筆跡をご覧になろうと思出しなされたのだ。その高札をご覧になると、流れ落ちる涙で墨が消えて、文字の形は見えないけれども、重盛という文字だけは彫って墨を入れているので、生きていた時のままで変わらないので、泣きながらそれをご覧になった。筆跡は千代の形見だと(重盛卿が)残した言葉も、本当に(そのとおりだと)しみじみ悲しくお思いになる。

(中将維盛が)お堂に入り、観音様の前で念仏を唱えていらっしやると、一人の僧が来て一緒に読経していたが、不審そうに(中将を)見申し上げて、「あなたはどちらからお参りですか」と尋ねる。(中将が)「京(＝都)の方からです」とお答えになると、「法然上人がいらっしやっているのをお聞きになつてのお参りですか」と言う。中将は、「そのことは前もっては知りませんでした。(法然上人は)何のためにお越しになつたのですか」と聞き返しなされると、「近いうちに、念仏法問の説教があります」と申し上げて、詳しく話をして立ち去った。

中将は与三兵衛重景を呼んで、「ぜひとも都に上り、法然上人にお会い申し上げ、後世のことをお尋ねすべきではあるけれども、生きていくのが不自由な身の上なのでどうしようもなかった。(しかし)上人がたまたまこの寺にいらっしやるということだ。遠慮はあるけれども、お会い申し上げることはどうしたらいいだろうか」とおっしゃると、重景はきちんと正座して、「何のご遠慮があるでしょうか。上人は生き仏だとお聞きしています。人を仏道へ導くのにふさわしい高僧でしょう。後世の菩提のためにもご聴聞なさるその時は、たとえ災いにお遭いになつても、痛いとお思いになつてはいけません。合戦場で命を失うと、修羅の世界に生まれ(変わ)るということですよ。言うまでもなく、仏法を聴

く喜びを得て命を失うことがあったなら、阿弥陀如来がいると伝えられる極楽浄土に往生できるだろうとお思いになるべきです」などと、しつかりと申し上げたので、(中将は) そうするのがいいと思って、夜になってから重景を使いに行き、法然上人に申し上げたことは、「(私) 維盛は高野山参詣の志があつて、屋島をこっそり脱出してここまでやって参りましたが、ちょうど今が(法文をお聞きするのにも最)ふさわしいことだと存じます。悟りの境地に至るための法文を一句お聞きしたいのです」とおっしゃったのだった。

法然上人は哀れにお思いになって、すぐに中将を招き入れ申し上げ、お会い申し上げなさつて、「どうしてどうして、奇特なことと存じ上げます。都を脱出なさった後、(平家の) 人々があちらこちらでお亡くなりになったとお聞きするにつけて、あなた様の身はどうなつてしまつていらつしやるだろうかと気がかりに思い申し上げておりましたが、再びお会い申し上げることができて、しみじみとうれしいことと存じます。それにしてもこれほどの混乱のさなかに、はるばる高野山へ参詣するお志は、立派に思い立ちなされたものですね」と言つてお泣きになる。中将がおつしやるには、「平家一門の栄華は、もはや行きづまつて、安徳天皇を始め申し上げ、一族がことごとく西海へ落ち延びたので、同じようにさまよい出て来ました。つらいことが多かった中で(も特につらかったのは)、難波潟や、一の谷で公卿や殿上人がたくさん亡くなった(ことです)。たまたま生き残った者も、住む場所もありません。一日中今にも敵に討たれるかもしれないと悲しんでいます。とにかく落ちていられませぬ。だから結局逃れることはできないけれども、尊い結界の地とお聞きしたので、高野山に参詣して出家もして、その後極楽往生を遂げたいと思ひまして、屋島を逃れ出てここまで山伝いに歩き続けて、(法然上人に) お会い申し上げることは本当にうれしいことです」とおつしやる、その夜は上人の部屋にお泊まりになり、泣きながら話し続けなされたが、明け方近くに「私が幼い時から肌身離さず毎日のお勤めでお読み申し上げたお経がなくなりになります。(私が) 水の底に沈んだ時には、一緒に沈め申し上げることが、罪深く思われます。もし(私が) 死んだとお聞きになった時には、思い出して後世をお弔いくださいませ」とおつしやる、このお経を(上人に) お渡し申し上げる。

【解答】

二

イは「打ち札の文字が消えていた」「名前くらいは刻み付けておいてほしかった」が×。亡き父の筆跡が残っていて涙したのである。

ロは僧と中将のやりとりが逆である。中将が僧から尋ねられて「京の方から(来た)」と答えたのである。

ハは重景が「自分が危険な目に遭わされることになったとしても」と答えたというのが×。「災害に遭はせ給ふとても」(第三段落)と尊敬の補助動詞を使っているので、「(中将が) 危険な目にお遭いになつても」が正しい。

ホは「経典を、法然上人から譲ってもらつた」が逆である。肌身離さず持っていた経典を、死ぬ前に上人に託したのである。

【作品(作者) 解説】

「げんぺいせいすいき」とも「げんぺいじょうすいき」とも読む。鎌倉時代の軍記物語であるが、

作者も成立年代もわかっていない。あらすじは『平家物語』と大差ないが、作者の源氏寄りの姿勢がうかがえる。多種多様な歴史記事を収録し、文学よりも史書として、武家社会において兵法・倫理・教養などの模範となる古典とされた。